

II-88 住民意識に及ぼす河川スケールの影響

九州大学大学院 学生員○内山 裕三 九州大学工学部 正 員 小松 利光
日本下水道事業団 正 員 山本 賢一 宮崎大学工学部 正 員 杉尾 哲

1. はじめに

近年、都市内の水辺が見直されアメニティ向上を目的として水質浄化や様々な親水施設が整備されるとともにそれらの施設に対する多くの研究が行われている。しかし、これらの研究には各地域の特性にまで踏み込んだものは少なく、親水施設に対する住民の評価や行動が形成されるに至った背景については十分な議論が成されていないように思われる。そのため、これらの研究からは親水施設の一般的構造特性は明らかになっても、その地域の住民にとって望ましい施設の形態を考えていくための知見を得ることは難しい。そこで本研究では、導水によって水質改善がなされた都市小河川に対する住民の評価を近接する大河川との関連において分析し、住民意識に及ぼす河川スケールの影響を探ることとする。

2. 調査対象と調査の概要

調査対象河川は、宮崎県宮崎市の小松川である。小松川は宮崎市の市街地を貫流し、九州第二の流域面積を持つ大淀川に合流する小河川である。かつては魚とりや水遊びなど周辺の子供達の格好の遊び場であったものの、元々の固有流量の少なさに加え、周辺の都市化にともなう雑排水流入の増加により、近年水質が著しく悪化しドブ川と化していた。その改善策として昭和59年に大淀川からポンプ導水による水質浄化が図られた。しかし、下水道の整備がまだ不十分であり（下水道普及率 64.8%）、また周辺住民の内水災害に対する心配などから河道や周辺の親水空間としての整備もまだこれからという状態で、雨水排水路的性格が強い川である。

調査としては、小松川の水源付近から河口までの長さ約5km、幅約1kmの範囲にわたり成人を対象としたアンケート調査（H1.10.9～11実施）を行った。調査表の配布数は500部で、回収率は90%であった。また調査に際して、地域的に偏りが生じないように予め調査範囲を幾つかの区域に分けた後、個別訪問により調査票を依頼し後日回収する留置法をとった。

図-1に小松川の位置関係及び調査対象区域の概要を、表-1に調査表の内容を示す。今回の分析は小松川、大淀川に対する評価であるC,D,F,Gについて行った。C,Dは河川及びその周辺に対する全体的な評価を、D,Gは河川の各環境構成要素に対する評価をそれぞれの河川について尋ねたものである。

3. 分析結果

周辺地域の住民の小松川、大淀川それぞれに対する評価には、一人一人独自なものがあると同時に、多くの人々が共通して抱えている評価もまた存在すると考えられる。したがって、各河川に対する個人の評価をまとめた場合地域としてある傾向を示すと思われる。そこで、総体的評価、個別的评价の調査結果を度数分布図として図-2(a)(b)に示す。

これをみると、(a)より総体的評価については大淀川では「関心ある」「生活にとって好ましい」「親しんできた」などの項目に意見が集中し、地域としてある明確な評価が表れているのに対し、小松川では人々の間で意見が分かれ評価が一定していないことがわかる。また、(b)より個別的评价については(a)における大淀川ほど際だったものではないが小松川・大淀川ともまとまりのある評価を示している。

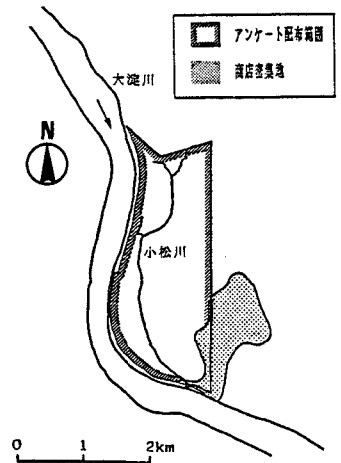


図-1 河川の位置
及び調査区域の概要

表-1 調査表の内容

A	回答者属性
B	小松川の利用状況
C	小松川の総体的評価
D	小松川の個別的评价
E	大淀川の利用状況
F	大淀川の総体的評価
G	大淀川の個別的评价

つぎに、小松川に対する評価が近接する大淀川の影響によって変化するかどうかを調べるために、総体的評価と個別的評価について数量化Ⅲ類による分析を行った。結果を図-3に示す。なお、結果は「大淀川に親しんできた人」（▲で示す）と「大淀川に親しんでこなかった人」（△で示す）、及び「大淀川周辺に満足している人」（■で示す）と「大淀川周辺に満足していない人」（□で示す）に分けて算定している。ここで、分析において使用した総体的・個別的それぞれの評価項目は、図-2の〈スケールの意味〉で示した項目と一致する。また、大淀川についての評価も○印で示しておく。

これより、大淀川の評価別にみた小松川の評価は、個別的評価においてはほとんど差異がみられないものの、総体的評価においては「大淀川に親しんでこなかった人」のみが他の意見に対して隔たっている。これは、個々の環境構成要素についての評価傾向がほぼ同じであっても、河川及び河川周辺に対する全般的な評価傾向は、隣接する大河川との住民の接し方によって影響を受ける可能性があることを示唆している。

次に「大淀川に対する評価」別で小松川に対する総体的評価を度数分布図で示したのが図-4である。これから、「大淀川に親しんできた人」の小松川に対する評価があまりはつきりしていないのに比べると「大淀川に親しんでこなかった人」についてはまとまった傾向性（小松川に対する評価の悪さ）が見られ、これらのことから大淀川との接し方によって評価に違いが表れるのがわかる。

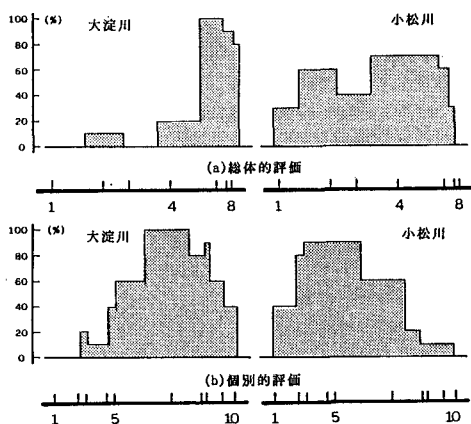
4. 結論

今回の調査により以下のことが明かとなった。

小松川においては、個々の環境構成要素に対しては比較的まとまりのある評価がなされているのに対して、川全体に対しては評価にはばらつきがあり特定なものは得られなかった。このことから個別的評価がダイレクトに全体の評価を規定するものではないことがわかる。また、大淀川との接し方によっても小松川に対する総体的評価に違いがうまれる。つまり、小松川のような小河川に対する評価は河川自体の構成要素だけでなく、近接する大河川の評価も外的因子として十分影響し得る。

＜参考文献＞

- 1) 加藤孝義：空間のエコロジー（新曜社）
- 2) 小松利光・山本賢一・内山裕三・杉尾哲：第34回水理講演会論文集、pp.43～48、1990



＜スケールの意味＞

- | 総体的評価 | 個別的評価 |
|--------------------|---------------------|
| 1. 関心ない | 1. 休息所・遊び場として重要ではない |
| 2. 親しんでこなかった | 2. 周辺の景色・雰囲気悪い |
| 3. 生活にとって好ましくない | 3. 水量少ない |
| 4. 周辺全体に対して満足していない | 4. 水辺に近づきにくい |
| 5. 関心ある | 5. 水が汚い |
| 6. 生活にとって好ましい | 6. 休息所・遊び場として重要 |
| 7. 親しんできた | 7. 周辺の景色・雰囲気良い |
| 8. 周辺全体に対して満足している | 8. 水量豊富 |
| | 9. 水辺に近づきやすい |
| | 10. 水がきれい |

図-2 評価の明確さ、広がり

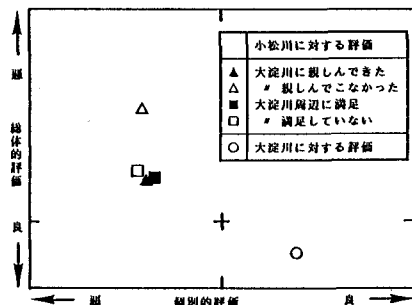


図-3 数量化Ⅲ類による分析

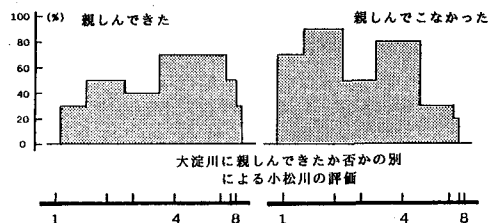


図-4 評価の明確さ、広がり